展示資料リスト

1-1 ◇「本居宣長色紙 更衣」一幅　【本居家寄託】
1-2 ◇◎「仲国図」宣長賛 一幅
1-3 ◎『古事記伝』巻十 一冊
1-4 ◇◎「中臣寿詞」筆
1-5 『歴朝詔詞解』(版本) 宣長著
1-6 ◇「懐紙書様手本」一幅　※「詠瀧紅葉和歌」

2-7 ◇「宣長澄月贈答歌」一幅
2-8 ◎「日記」宝暦九年正月十三日
2-9 ◎『源氏物語湖月抄』一冊
2-10 ◇「松平康定 鈴の歌」一幅
2-11　駅鈴　一点
2-12 ◇◎「鈴屋翁藤垣内詠草」双幅

3-13 ◇◎「一無庵」扁額
3-14 ◎「来訪諸子姓名住国并聞名諸子」一枚
3-15 ◎「音信到来帳」一冊
3-16 ◎「催馬楽ト云名ノ事等」一枚
3-17 「熊本社中本居追悼歌集」一冊

4-18 柱掛鈴 一点
4-19 七種鈴　６点 ※駅鈴は２ケース
(十字鈴、鉄鈴、鬼面鈴、茄子鈴、養老鈴、八角鈴)
4-20「古鈴図色々」二枚
5-21 ◇「鈴の図」田南岳璋画

5-22 ◇「ひちりきの歌」宣長詠 一幅
5-23 ◇「松園管弦会之序」一幅 【伊藤宗壽氏寄贈】
5-24 ◎「遍照寺会集」第六冊　一冊
5-25 ◎「寛政年間宣長詠草」第二冊
5-26 龍笛 一点
5-27 ◇◎「宣長・春庭短冊」一幅
5-28 ◇「柿本人麿像」宣長筆 一幅【小津明義氏寄贈】

6-29 ◇「故翁略伝」本居大平筆　一幅
6-30 ◇「本居宣長七十二歳像」一幅
6-31 ◎『玉くしげ』紙背「天地図」下書き 一冊
6-32 ◇「天地図」宣長作 本居弥生写 一幅

6-33 ◇「本居春庭像」疋田宇隆画 一幅【小津明義氏寄贈】
6-34 ◇「烏の図」疋田宇隆画　一幅
6-35 「詞のカード」 十二束
6-36 『詞の八衢』稿本 二冊

7-37 ◎『古事記伝』草稿 巻三十 一冊
7-38 ◎『古事記伝』再稿本 巻三十 一冊
7-39 『古事記伝』版本巻三十 一冊
7-40 『古事記伝』板木 二枚
7-41 ◎「学業日録」一冊
8-42 ◎「円光大師伝」宣長筆　一巻
8-43 ◎「詠浄土釈教歌」一枚
8-44 「覚」宣長筆 【長谷川紘一氏寄託】
8-45 ◎『日記』(万覚)

9-46 山田勘蔵ノート　数冊
9-47 岩田隆ノート　数冊
9-48 中根道幸手沢本『本居宣長全集』
9-49 諸氏ノート

10-50 ◎「経籍」一冊
10-51 ◎「事彙覚書」一冊
10-52 ◎「雑鈔」二冊
10-53 ◎「古書類聚抄」二冊
10-54 ◎「鈴屋新撰名目目録」一冊

11-55 ◎『本居宣長随筆』九冊

12-56 ◎「新版天気見集」一冊 天気
12-57 ◎「都考抜書」一冊 京都
12-58 ◎「和歌の浦」一冊 和歌
12-59 ◎『排蘆小船』一冊
12-60 ◎『石上私淑言』一冊
12-61 ◎「古書抜き書き」一枚
12-62 ◎『国号考』宣長著　一冊

13-63 ◎『延喜式』巻八
13-64 ◎『万葉集』宣長手沢本　一冊
13-65 ◎『日本王代一覧』宣長手沢本 一冊
13-66 ◎『日本書紀』宣長手沢本　一冊
13-67 ◎『古事記』中巻 宣長手沢本 一冊
13-68 ◎「書抜物」

14-69 ◎「古事記雑考」一冊
14-70 ◎「詠歌疑條」一冊
14-71 ◎「十三代集抄」宣長筆 一冊
14-72 ◎『詞の玉緒』草稿 一束

15-73 ◎「上代系図」一冊
15-74 ◎「年代記」一冊
15-75 ◎「新撰姓氏録」一冊
15-76 ◎「新撰姓氏録目録」一冊

16-77 『鈴屋集』巻九
16-78 ◎『體源抄』一枚
16-79 ◎「母勝書簡」宝暦四年十月十三日
16-80 ◎『うつほ物語』宣長手沢本 二冊

令和元年 夏の特別展

古代のおと　―古を聞く、古を見る―

令和元年６月１２日(水)～９月８日(日)

資料名の頭の記号は、[◎：国重要文化財 ○：三重県有慶文化財] を表しています。

１-１．耳の人・宣長

宣長は耳の人、古典の研究は単なる文字の研究ではありません。「古事の記をらよめばいにしへの手振り言問ひ聞き見るごとし」と詠んだように、『古事記』を正しく読み解くことで、古代の人々の声を聴くことができると考えていました。

また、少し耳を澄ましてみると、古典の世界にもたくさんの音が溢れていることに気付きます。風が草木を揺らす音、虫や鳥の声、宮廷で合奏される楽器の音色、人々の話し声……宣長の学問は、古典に書かれたそのような風景を再現しようとするものだったのです。

◎「仲国図」狩野遙信画 宣長賛

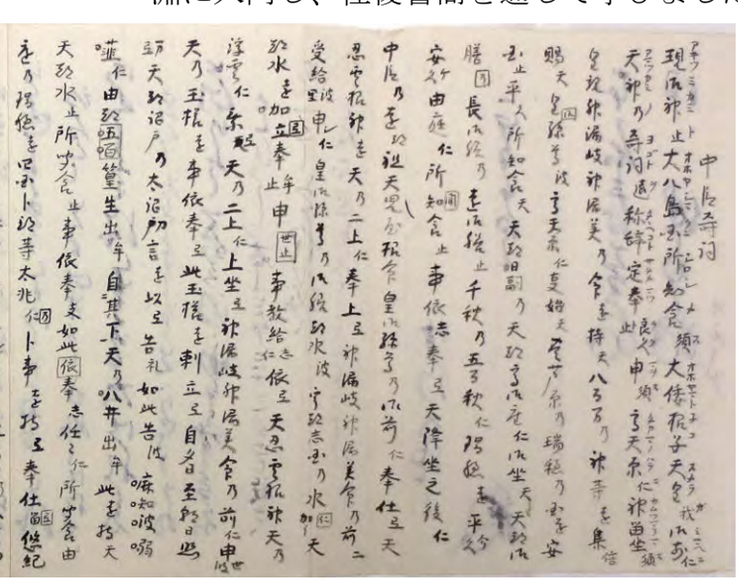
すむ月に すみのぼる夜の 琴のねは　かくれしやども かくれなきまで

(月の明るい夜に響きわたる琴の音によって、月があたりを照らすように、隠れているその場所も明らかだ)

『平家物語』などに取り上げられる、高倉天皇と小督(こごう)の局の悲恋の一場面を題材にした絵画に、宣長が歌を添えています。
美しく、当世の琴の名手としても知られた小督の局は、高倉天皇の寵愛を受けていましたが、二人の仲を疎んじた中宮徳子の父・平清盛から逃れ、嵯峨野に身を隠してしまいます。天皇の命により小督を探す源仲国は、「想夫恋」を奏でる琴の音を頼りに、小督を見つけ出しました。

１-２.真淵もびっくり

そんな宣長の研究を導いたのが、宝暦１３(1763)年、宣長が３４歳のときに出会った賀茂真淵(かものまぶち)です。真淵は、初対面の宣長に対してもおざなりな態度を取らず、宣長が打ち明けた古事記研究の志を受け止めてくれました。かつては『古事記』の研究を目指していた真淵。自身の思いを託せる若い研究者が現れたことが嬉しかったのでしょう。宣長は真淵に入門し、往復書簡を通じて学びました。



真淵の教えに従い、『万葉集』を読んで古代の言葉を学ぶことから始めた宣長。字数に上限のある歌では省かれてしまう助字(てにをは)が、祝詞や宣命には残っていることを指摘し、真淵を驚かせました。

◎「中臣寿詞(なかとみのよごと)」宣長筆

近衛天皇の大嘗祭（新天皇の即位後、初めて行われる新嘗祭を、特に「大嘗祭」という）で天皇に奏上された寿詞(ことほぎ、祝う言葉)として藤原頼長『台記別記』に載るのが「中臣寿詞」です。それまで注目されてこなかったこの寿詞を『玉勝間』で取り上げ、世に紹介したのは宣長でした。

「こと」の事

「古代のおと」展では、「古代」、「音」というテーマにちなみ、『古事記』、『源氏物語湖月抄』をはじめとする数点の資料について、日本古典ともゆかりの深い「琴」にまつわる場面やページを展示しています。

さて、かつて「こと」という言葉は、特定の楽器ではなく弦楽器全般を指すものでした。現在日本で“お琴”というときには、「箏（そう）」を指すのが一般的ですが、日本で演奏されてきた「こと」には、奈良時代に渡来した箏や琴（きん）、記紀万葉にも記述のある日本古来の和琴（やまとごと/わごん）などがあります。そのため、宣長が好んだ『源氏物語』では、「箏のこと」、「琴のこと」、「琵琶のこと」といった表現で区別されました。

本展示で取り上げた三種類の「こと」について、展示資料とともにご紹介します。

〈参考〉◎『體源抄』豊原統秋著、宣長写
中世の雅楽書『體源抄』には、清涼殿に収められた厨子の図があり、上段から琵琶、箏、和琴が描かれています。

箏（そう/こと）

奈良時代に中国から渡来した「こと」です。絃の数は１２本、１３本とあったものが、唐代以降に１３本になり、日本にはこれが伝わりました。柱(箏柱)を立てて調弦します。

主に雅楽の合奏に取り入れられましたが、平安時代には装飾性の高いものも作られ、貴族階級の人々に愛用されたといいます。室町時代の末頃に筑紫国(福岡県)で興った「筑紫曲」で用いられたことから「筑紫箏(琴)」とも呼ばれるようになりました。

また、江戸時代に入ると、それまでの雅楽の合奏から離れ、一般の流行歌の伴奏にも使われるようになり、現在でも広く親しまれている楽器です。

【関連展示資料】
『源氏物語湖月抄』紅葉賀巻(2-9)、
「事彙覚書」(10-51)、
「母勝書簡」(16-79)

◎「事彙覚書」宣長筆
諸書からの抜き書きを、内容ごとに分けて記したもの。宣長１７歳頃の起筆と考えられます。
楽器をまとめた項目には、琴(キン/コト)と書かれていますが、コトジ(琴柱)が描かれていることや、構造から見ると箏でしょう。飾り箏(かざりごと)の各部位の名称、三味線との調弦の方法が載っています。

琴（きん）

琴（きん）もまた、中国古来の楽器です。古くは五絃でしたが、現在では七絃のものが知られます。箏よりも小型で、音階を調節するための琴柱を使いません。また箏が合奏に使われるのに対し、琴は独奏楽器として用いられました。孔子以来、中国では文人たちのたしなみとされた楽器です。

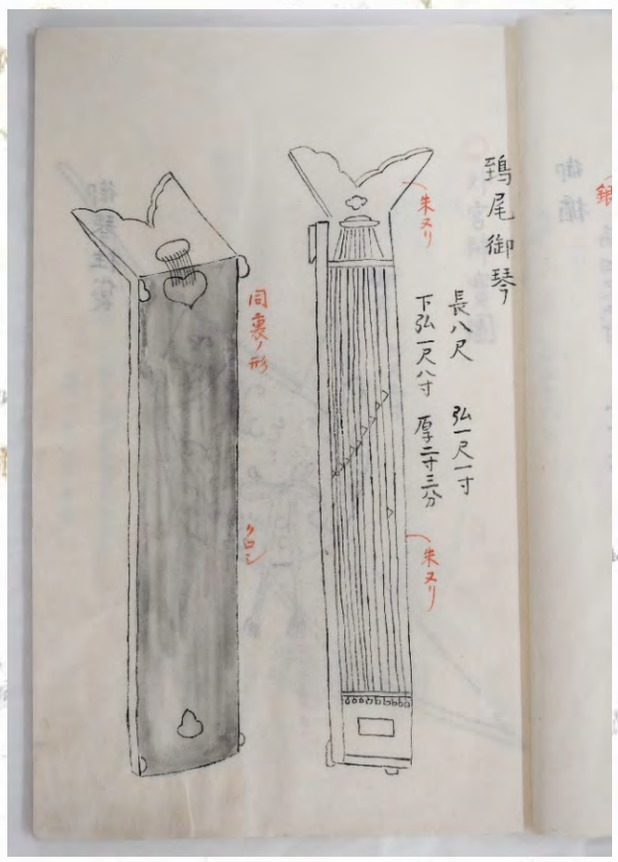
日本には奈良時代に伝わり、天皇をはじめとする皇族・貴族たちに愛されましたが、平安時代の末に衰退。江戸時代に入って中国から再び七絃琴が持ち込まれ、文人墨客たちの間で広がりました。寛政６年に松坂を訪れた浦上玉堂も琴の名手で、宣長もその演奏を聞いています。

【関連展示資料】
「来訪諸子姓名住国并聞名諸子」（3-14）、
『宇津保物語』（16-28）

◎『宇津保物語』宣長手沢
『源氏物語』にも影響を与えたといわれる、現存最古の長編物語。琴の伝授が物語のひとつの主題になっています。唐に行こうとした俊蔭が難破して漂流、阿修羅から霊琴を得る場面から始まります。
宣長も、巻の順序など構成の問題に深い関心を持って考察しています。

和琴（やまとごと/わごん）

『古事記』、『日本書紀』に出てくる琴は、箏や琴(きん)が渡来する以前から日本にあったもので、「やまとごと」「わごん」と呼ばれます。弥生時代から古墳時代にかけての日本各地の遺跡から、琴状の木製品が発掘されていることや、琴を弾く姿の埴輪が出土していることからも、その歴史の古さを知ることができます。また、伊勢神宮には、鵄尾御琴（とびのおのおんこと）という和琴がご神宝として収められています。絃は６本で、鵄尾御琴のように柱を持つものもあります。　かつては神事・葬送儀礼に用いられたと考えられ、平安時代頃には「御神楽」や「東遊」などの音楽や、雅楽の場で活躍しましたが、次第に宮中、あるいは神社で奏される儀式音楽といった限られた場でのみ演奏されるようになりました。



【関連展示資料】
『古事記伝』（1-3）、『日本書紀』（13-66）、
『鈴屋集』（16-77）、『體源抄』（16-78）

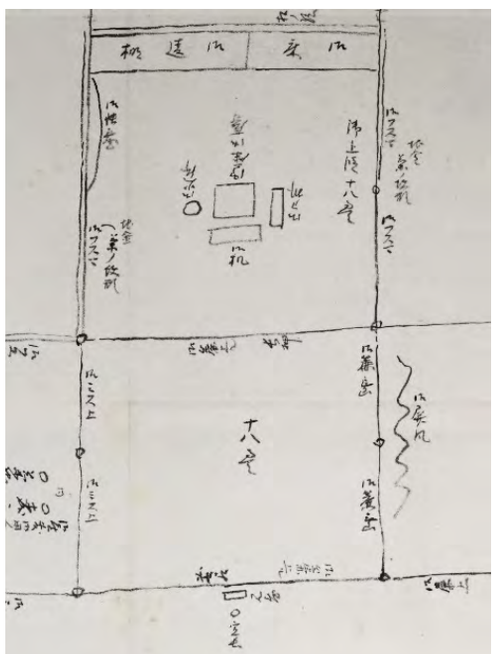
〈参考〉◎「二所太神宮神宝図」宣長写
伊勢神宮（内宮/外宮）のご神宝の図。宣長は神宮の神官・荒木田尚賢から元図を借りて写しました。
これらの神宝は、様式を守りつつ式年遷宮ごとに新しく作り替えられていきます。

２．日本古典は声だ

宣長は松坂で、約４０年間にわたって古典の講釈を行いました。参加者は主に松坂の町人たち。『源氏物語』をはじめ、『万葉集』や『古今集』などの歌集、歌物語、随筆、日記文学など、さまざまな本を対象にしました。講釈は対象の本について先生の解釈を聞いて学ぶ勉強法です。聴講者が全員テキストとなる本を持っているとは限りませんし、まして宣長が講釈をするのは、仕事が終わった後、つまり日が暮れた後です。聴講者たちは充分とはいえない明るさの中、宣長の声を頼りに古典を学びました。

歌を詠み伝えるのも声、みんなで集まって講釈を聞いたり議論したりするのも声。そもそも日本語特有の文字である「ひらがな」や「カタカナ」が確立したのは平安時代のことですから、古代の日本は声の文化でした。宣長や周囲の人々は、古典を楽しみ学ぶ中で、そんな「声」の世界に没頭していきます。

とりわけ源氏講釈は人気が高く、晩年には浜田藩主・松平康定、紀州藩の藩主・徳川治宝への御前講釈などでも『源氏物語』が撰ばれました。



〈参考〉寛政６(1794)年、和歌山城で『源氏物語』紅葉賀の御前講釈を行ったときの、部屋の間取りを控えたもの。十八畳の間のさらに奥に座る治宝に聞こえたのですから、宣長の声はよく通ったのでしょうね。　（宣長自筆）

◆ 湖月抄の付箋

『源氏物語』紅葉賀の巻に、「箏の琴は中の細緒のたへ難きこそ所せけれとて平でふにをしくだして調べたまふ（“箏は中の細緒が切れやすく、扱いが難しい”といって平調に合わせてお弾きなさる）」という一節があります。光源氏が紫の上に箏を弾かせようとして調絃する場面ですが、「中の細緒」が、十三本ある絃のうちのどの絃を指すのか、当時の注釈には揺れがありました。

宣長が使った『湖月抄』には、この部分についての門人・村田光庸の説を記した付箋が貼られています。箏の構造と、実際に演奏した際に多用する絃、切れやすい絃はどれなのかという視点から考察したもので、光庸が日常的に箏に触れていた様子をうかがわせる内容です。

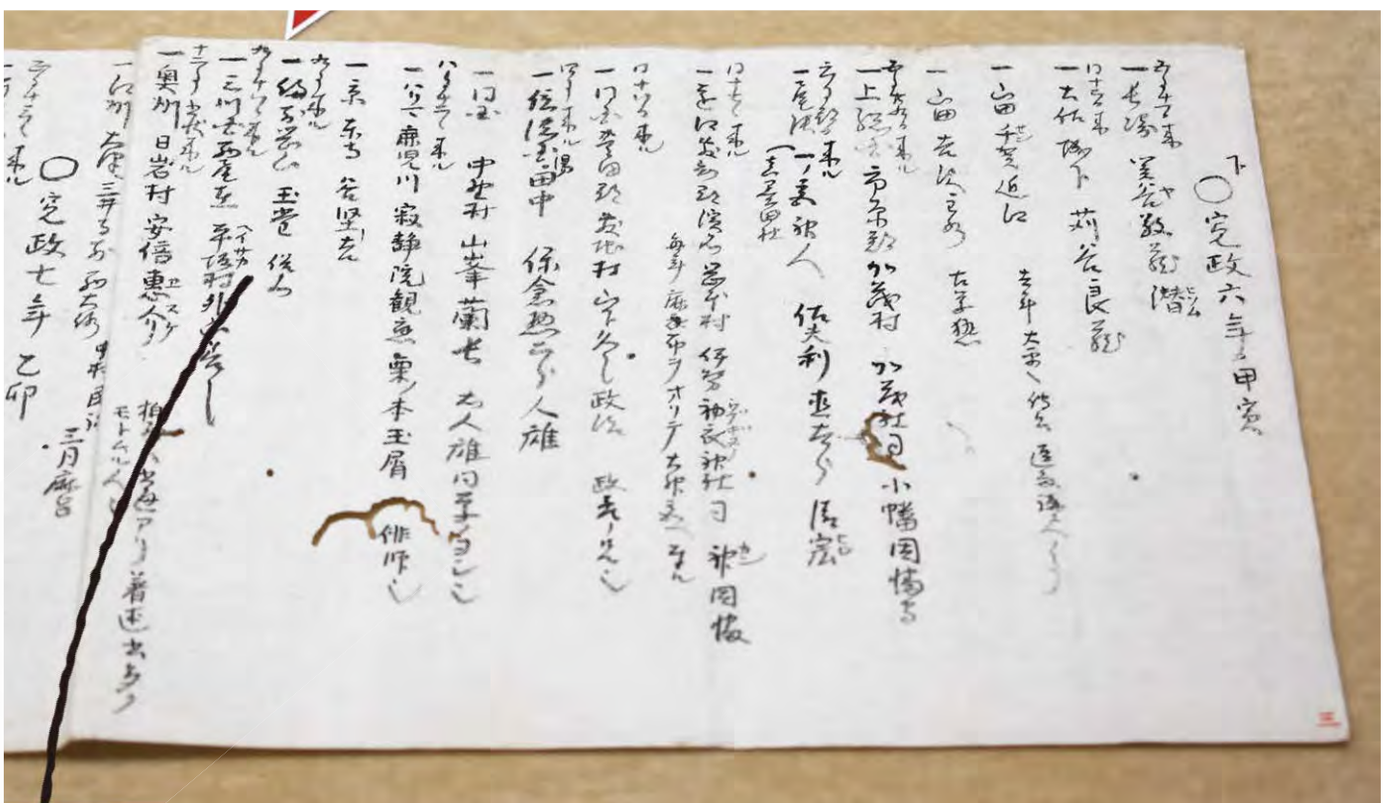
◎『源氏物語湖月抄』北村季吟著、本居宣長手沢

北村季吟による『源氏物語』の注釈書。江戸時代には『源氏物語』のテキストとして広く読まれました。宣長が源氏講釈の際に使ったのも『湖月抄』です。

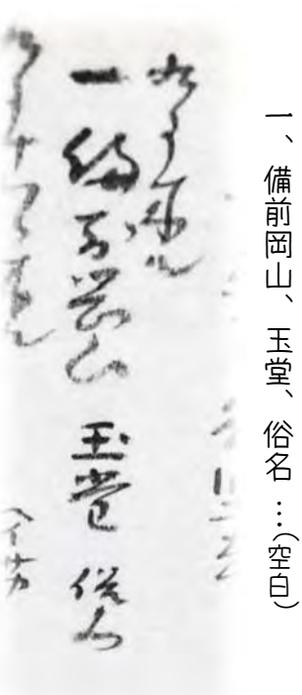
３．鈴屋訪問

宣長が学問に励み、次々と研究を発表するようになると、その名前は広く知られるようになっていきました。伊勢参宮に行くし、せっかく松坂を通るなら宣長先生に会ってみたい。直接話をしたり、講釈を聞けたりなんかしたら上々…！と意気込んでいたかどうかはわかりませんが、松坂の町が伊勢街道（参宮街道）沿いにあることも幸いし、各地から身分も職業もさまざまな人が訪れました。

◆ 浦上玉堂(うらかみぎょくどう)の来訪



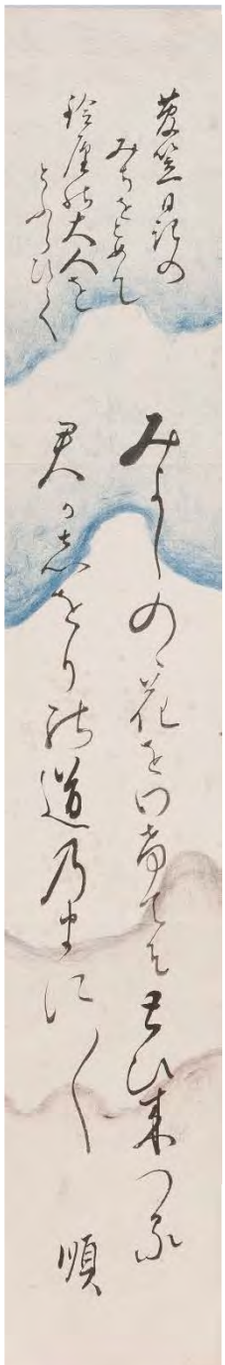
◎「来訪諸子姓名住国并聞名諸子」宣長筆
安永６(1777) 年～寛政１２(1800) 年の来客記録。３００余名の氏名と住国が記されています。



九月来ル
一、備前岡山、玉堂、俗名…(空白)

国宝「凍雲篩雪図」の作者として知られる浦上玉堂（1745-1820）は、備中鴨方藩の武士。学問や詩作にも関心が高く、琴(きん)を得意としました。寛政６(1794)年・５０歳のときに脱藩し、二人の息子(春琴、秋琴)を連れて諸国遍歴を始めます。この年の９月には松坂にも立ち寄り、宣長とも対面しました。後に話を聞いた宣長の門人・田中大秀によれば、このときに披露されたのが催馬楽のひとつ「伊勢の海」。本来催馬楽は箏、琵琶、笙などの雅楽器による合奏を伴う歌曲ですが、玉堂はこれを琴(きん)で演奏しました。宣長も「伊勢の海」の歌謡に合わせて、歌を詠んでいます。

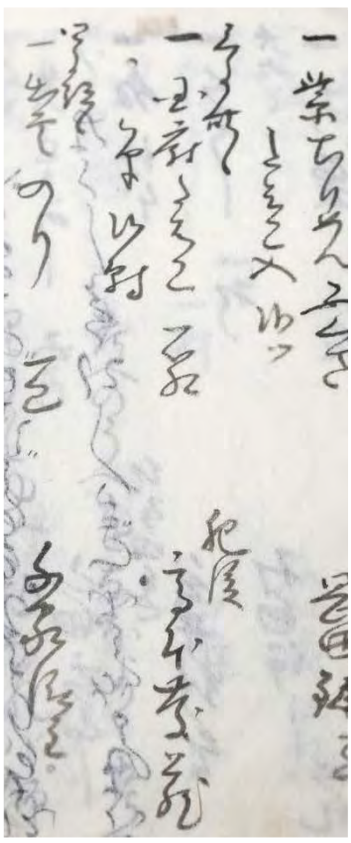
師翁(宣長)、玉堂老人がいせのうみの曲うたひて琴弾けるを聞給ひて
よにたらし ことの音き〉 いせの海や いけるかひをも ひろひける哉
田中大秀『ひとつまつ』(『田中大秀』巻５ 勉誠出版)



〈参考〉高本順 短冊「みよしのの 花をわけてぞ とひ来つる 君がしをりの 道のまにまに」

◆高本順(たかもとのしたごう)一行の来訪

寛政９(1787)年、熊本藩校時習館で教授を務めた儒学者・高本順が門人たちを連れてやってきました。一行は、宣長が吉野飛鳥を旅した際の行程(『菅笠日記』)をたどり、松坂に入ります。国学にも関心の深い順を宣長は歓迎し、愛宕町の菅相寺で歌会を開きました。



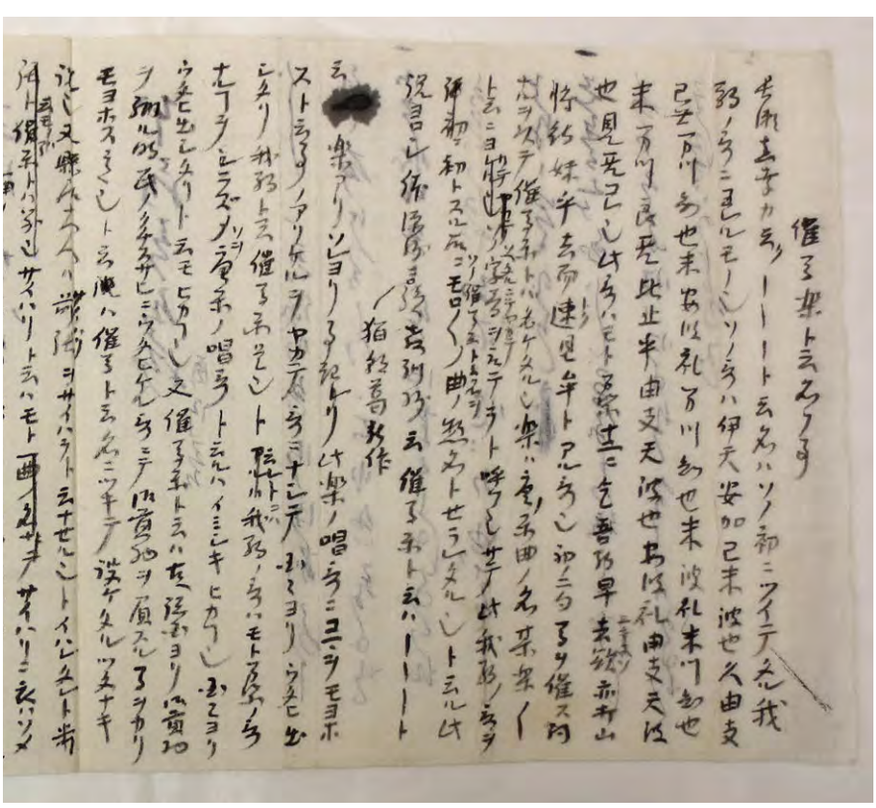
三月三十日　一、国府たはこ　筆二対　肥後高本慶蔵

◎音信到来帳　本居宣長筆

宣長がもらった土産や贈り物の覚え「音信到来帳」には、順が持参した「国府たばこ」も記録されています。熊本の特産品で、香りがよく、火がつきやすい良品です。実は愛煙家だったとも言われる宣長にとっては、嬉しい品だったことでしょう。

また、このとき順に同行していた門人のひとりである長瀬真幸(ながせまさき)は、催馬楽を得意とした人物で、宣長の求めに応じて、催馬楽の演目「席田(むしろだ)」を披露しました。そのときに話題に上がったのか、宣長は「催馬楽」という名称についての真幸の説を書き残しています。宣長は、催馬楽の名は「吾駒」という曲に由来するのだという真幸の考えを、『體源抄』や賀茂真淵の説より良いと褒め、後に『玉勝間』で紹介しました。

このように、交友関係が広がることで、新しい気付きを得ることや、情報や知識を共有する機会も増えていくのです。



◎「催馬楽ト云名ノ事等」宣長筆
真幸の説が取り上げられています。

浦上玉堂の「伊勢の海」を聞いたり、長瀬真幸に「席田」を謡ってもらったりと、催馬楽に興味を持っていたであろう宣長。真幸の「席田」を大変気に入ったことから、後年、熊本の門人たちが宣長の追慕会を開く際には、必ず催馬楽が謡われたといいます。

５．松坂に流れる管弦の音

江戸時代の松坂では、商家の主人など町の人々が集まり、茶会や題を決めて歌を詠む歌会、古典を読む会などの円居(まどい)が開かれていました。宣長も嶺松院(れいしょういん)歌会や、遍照寺(へんじょうじ)歌会といったいくつかの集まりに参加していましたが、そうした会の記録からは、当日の様子や、他の円居の様子を知ることもできます。本町を歩くと、どこからともなく琴の音が聞こえたという当時。(森壺仙『宝暦咄し』) 松坂で音楽に親しんでいた人々の様子を覗いてみましょう。

★遍照寺(へんじょうじ)の管弦会

遍照寺は現在の松坂日野町にあった寺院。宣長は来客があったときや、何かの祝いなどで臨時の歌会を開く際に利用することの多かった場所です。寛政６(1794)年５月、宣長は名古屋からやってきた門人・鈴木朗(あきら)を伴い、歌会を開きました。この日の「遍照寺会集」には、詠まれた歌とともに、ゲストである朗が遍照寺について記した文章が載っています。

「(遍照) 寺は里の東北尽くる処に在り。傍らは曠野に臨み、煙は遠林に罩、水は禾田を浸す。一望の景色、直に庭際に接す、爽塏閑寂、尤も雅集に宜し。**里中の管弦を善くする者、常に双日を以て、此に会し而して楽を楽しむ。**蓋し洋々乎たるかな(原漢文)」

『遍照寺歌集』寛政６(1794)年５月１７日 鈴木朗

町の外れにある遍照寺は水田に臨む眺望の良い場所で、しかも閑静であること。そのため、雅の会を開くのに適しており、とりわけ松坂で管弦の楽器をする人々は、双日(偶数の日)に集まって演奏を楽しんだ、ということが書かれています。

★九品院(くほんいん)の管弦会

宣長自身がこうした会に出ていたことを思わせる記録もあります。安永２(1773)年の九月十三夜の月見の日に九品院で開かれた会では、管弦の演奏も行われたことが、宣長の詞書からわかります。

「此夜人々詩をも作り琴ひき笛ふきて遊びける、ある人の詩の遊びの字の韻を和して
からやまと まじる詞の 玉琴に 調べ併せて 笛ふきあそぶ」(『石上稿』)

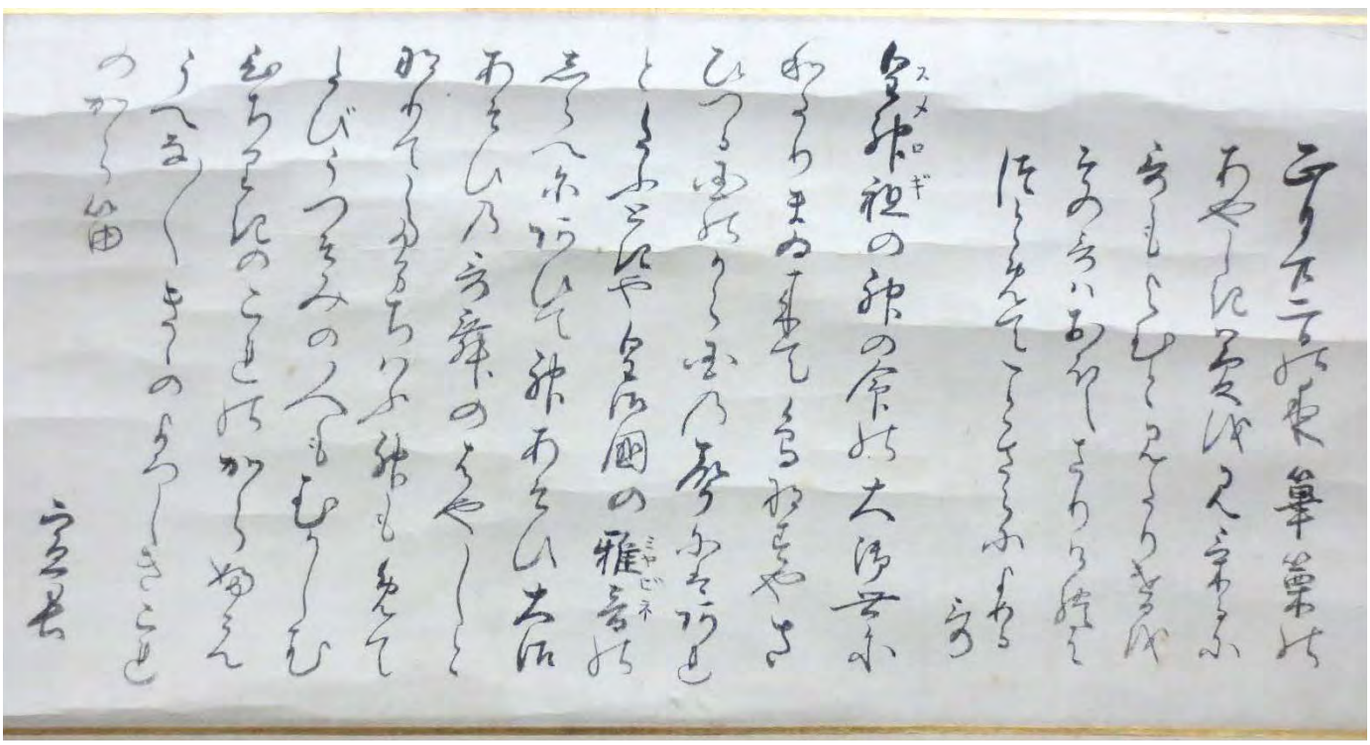
宣長が日頃使ったという横笛(ようじょう)は、ずいぶん使い込んだ痕跡が見られるので、こうした場での演奏にも加わっていたのかもしれません。

宣長が使った横笛

形は能笛とよく似ていますが、吸口と指孔の間にのどがないことから、雅楽や催馬楽に使用する横笛だといいます。「おうてき」と音読みすると「王敵」のようだと嫌われ、「ようじょう」と読み慣わされました。

「篳篥(ひちりき)の歌」宣長詠

あるとき“ひちりき（雅楽などで用いられる縦型の笛）”の夢を見たという宣長。その場で篳篥を題材に歌を詠んだものの、翌朝目覚めると、肝心の歌をすっかり忘れてしまっていました。そこで改めて詠んだのがこの長歌です。松坂の町でも演奏する人がいたというこの篳篥。もしかすると宣長は、この夢を見る前に誰かの演奏を耳にしていたのかもしれませんね。



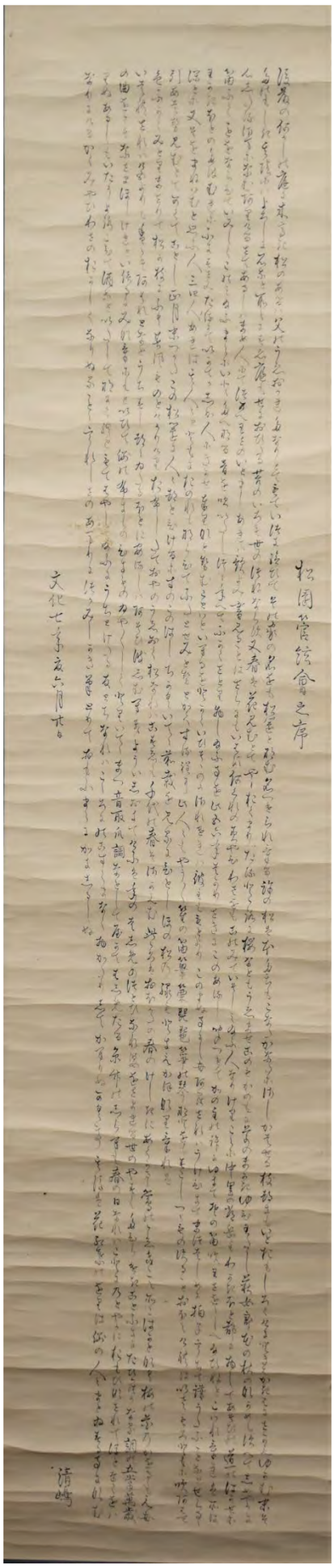
また、宣長の門人のひとり、本町の商家中里家の次男・常岳(つねおか)は、笛の名手として知られた人でした。宣長が、何でも器用にこなす人だと評価した常岳ですが、特に笛は、若い頃京都で師について学んだともいわれ、町の人々が教えを請うほどの腕前であったそう。師から譲り受けた「浪龍丸」という笛と、常岳の家の橿(かし)の木によせて、宣長が歌を詠んでいます。

たえせめや　ふく笛の名に　やどの名の　かし(橿)もなみたつ(浪龍/並み立つ)　ね(音/根)は長き世に

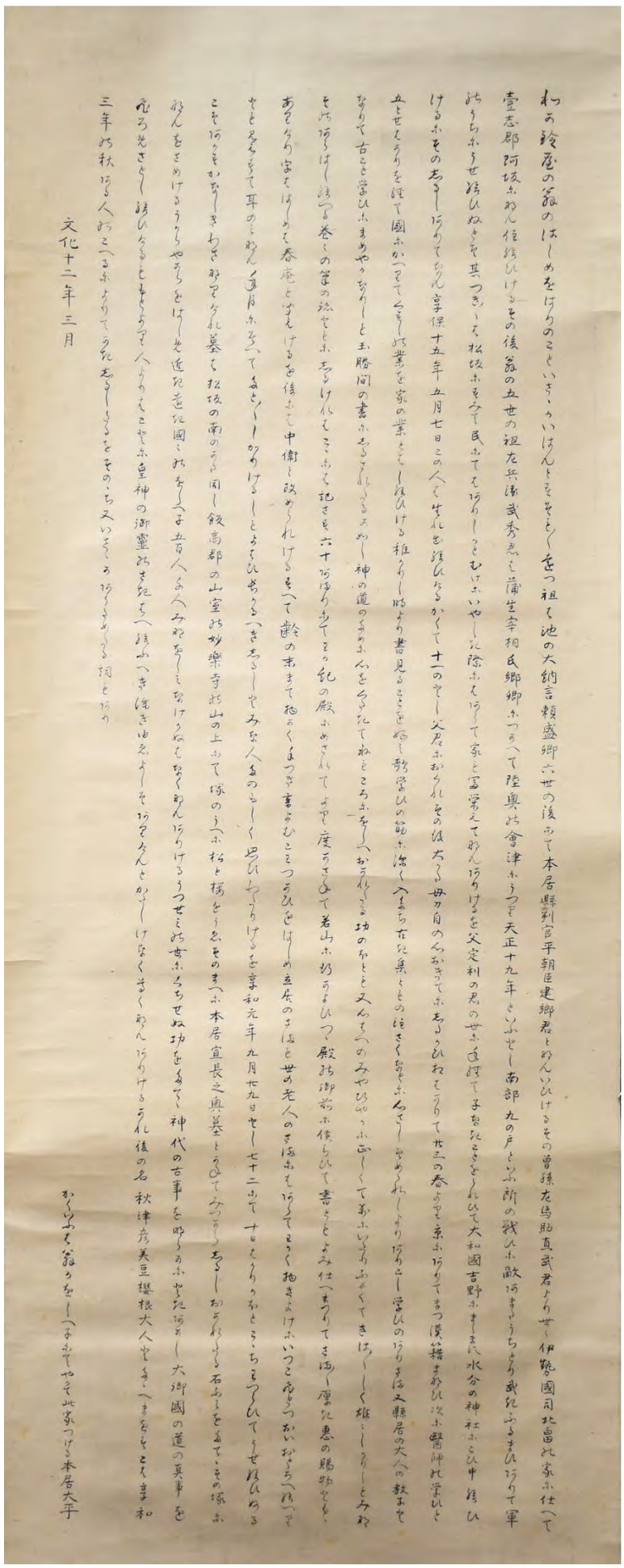
（『石上稿』寛政９年条）

さらに、今回初出品の「松園管弦会之序」では、中里常岳のもとで管弦を学んだ人々が演奏会を開く様子が示されています。指導を受けたいと熱心に頼み込んだ藤原某の求めに応じて、常岳が管弦の楽器を教えたこと、すると次第に人が集まるようになり、笛、琵琶、篳篥、琴などを習ったところ、文化７(1811)年の夏、とうとう演奏会を開くまでになったといいます。宣長の後、本居家を継いだ養子・大平の子である清嶋が記した文章で、この頃の松坂でも音楽に関心を持つ人々が活動していたことを教えてくれます。

6．連なる日本語

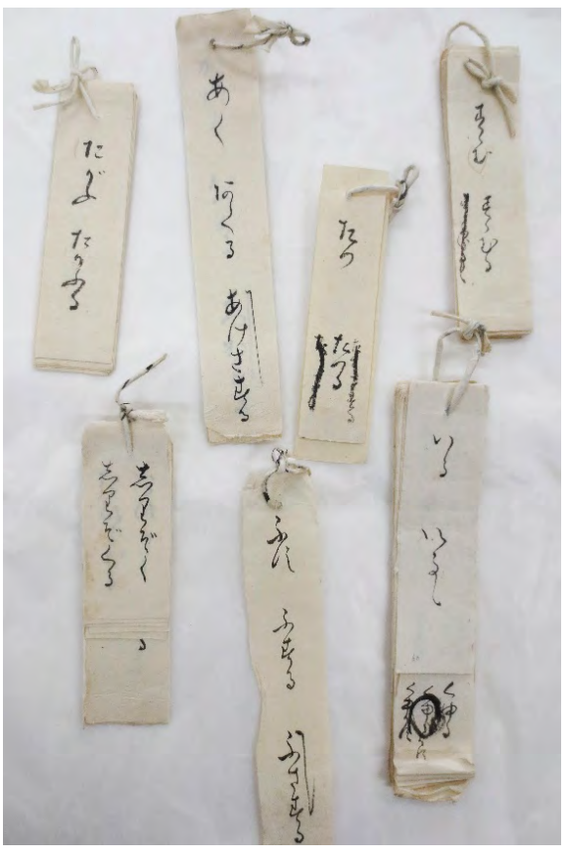


★初出品「松園管弦会之序」本居清嶋筆



「故翁略伝」本居大平

宣長の長男・春庭(1763～1836)は、本や地図を写したり、『古事記伝』の版下書きを担当したりと、よく父を手伝いましたが、３２歳のとき、病で視力を失ってしまいます。しかし、その後も妹や妻、門人たちに助けられながら、動詞の活用の種類・活用形の体系を定めた著作『詞の八衢(やちまた)』を完成させ、文法研究で画期的な業績を残しました。



用例を集めた「詞のカード」

では、どのように研究を行ったのでしょうか。
言葉の研究を行う上では、実際に言葉がどのように使われているのかを知る必要があります。春庭の最初の研究対象は動詞。まずは、さまざまな古典籍から動詞の用例を抜き出すところからです。

① 春庭は自分で本を読むことができないため、誰かがテキストとなる古典を読み上げます。
読み手は主に妹・美濃が努めました。

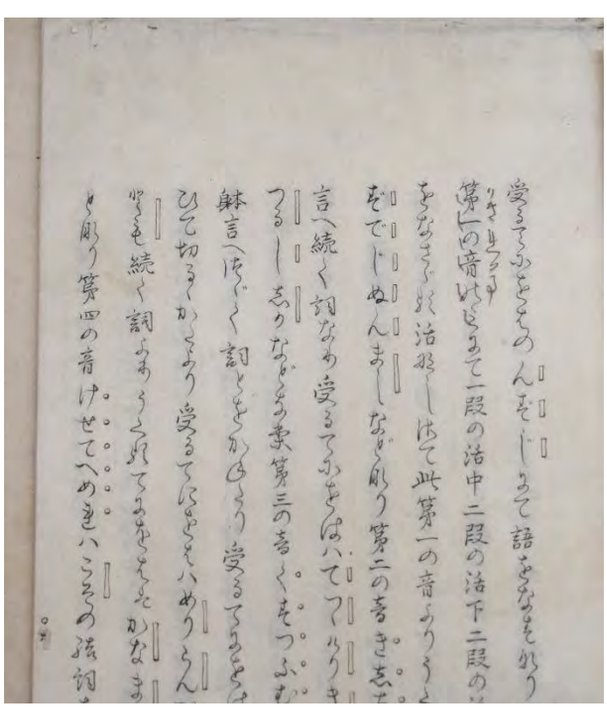
② それを聞いた春庭の指示で、動詞の用例を抜き出して紙片(カード)に書きます。
この作業は、宣長に入門するため、出羽国(秋田県)から来訪した大友親久が助けました。

③ 出来た紙片を春庭の指示に従って分類、そこから法則性を探ります。

④ 美濃、あるいは妻の壱岐が春庭の口述筆記を行い、原稿(『詞の八衢』稿本)が作られました。

書名の「やちまた」は、道がいくつにも分岐する場所を言います。分かれた道の一つを選ぶと目的地が変わってしまうように、言葉も活用によってその意味が大きく異なることを表したものです。

この稿本は長い間見つかっていませんでしたが、昭和４３(1968)年、春庭旧宅の屏風の下貼りになっていたことがわかりました。



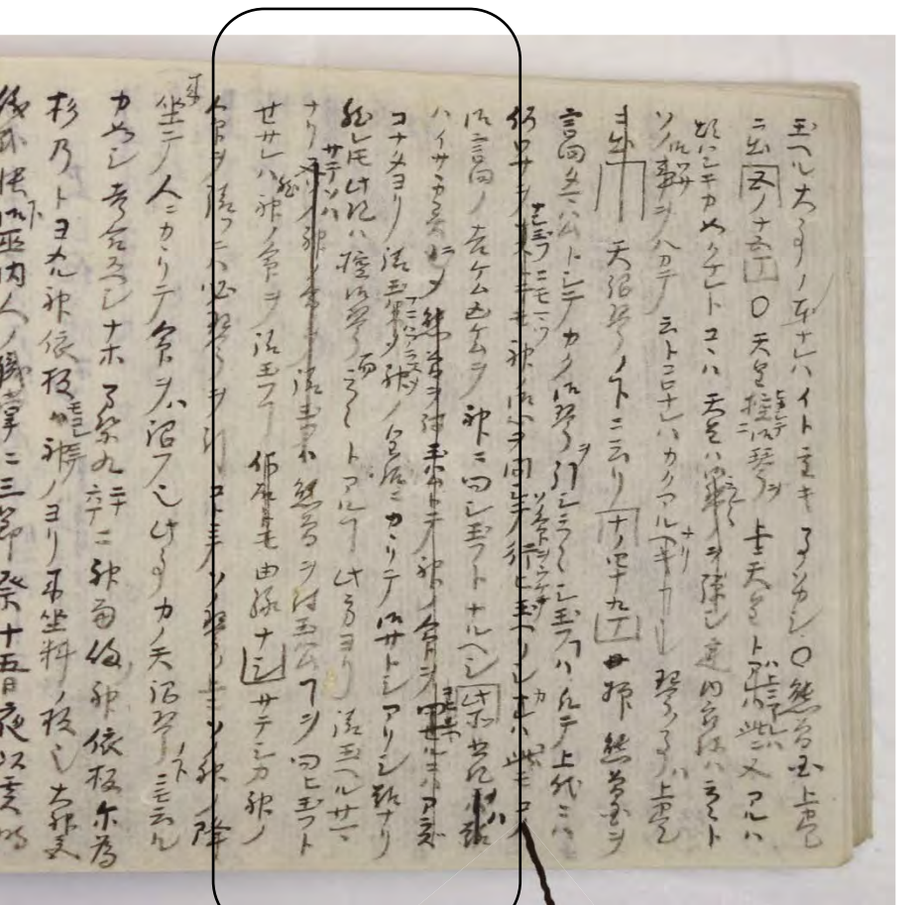
○『詞の八衢』稿本 本居春庭著 美濃代筆

○「本居春庭六十歳像」疋田宇隆画 本居春庭賛(美濃代筆)
影ばかり うつすにあかで 心をも なほかきとむる 水くきの跡

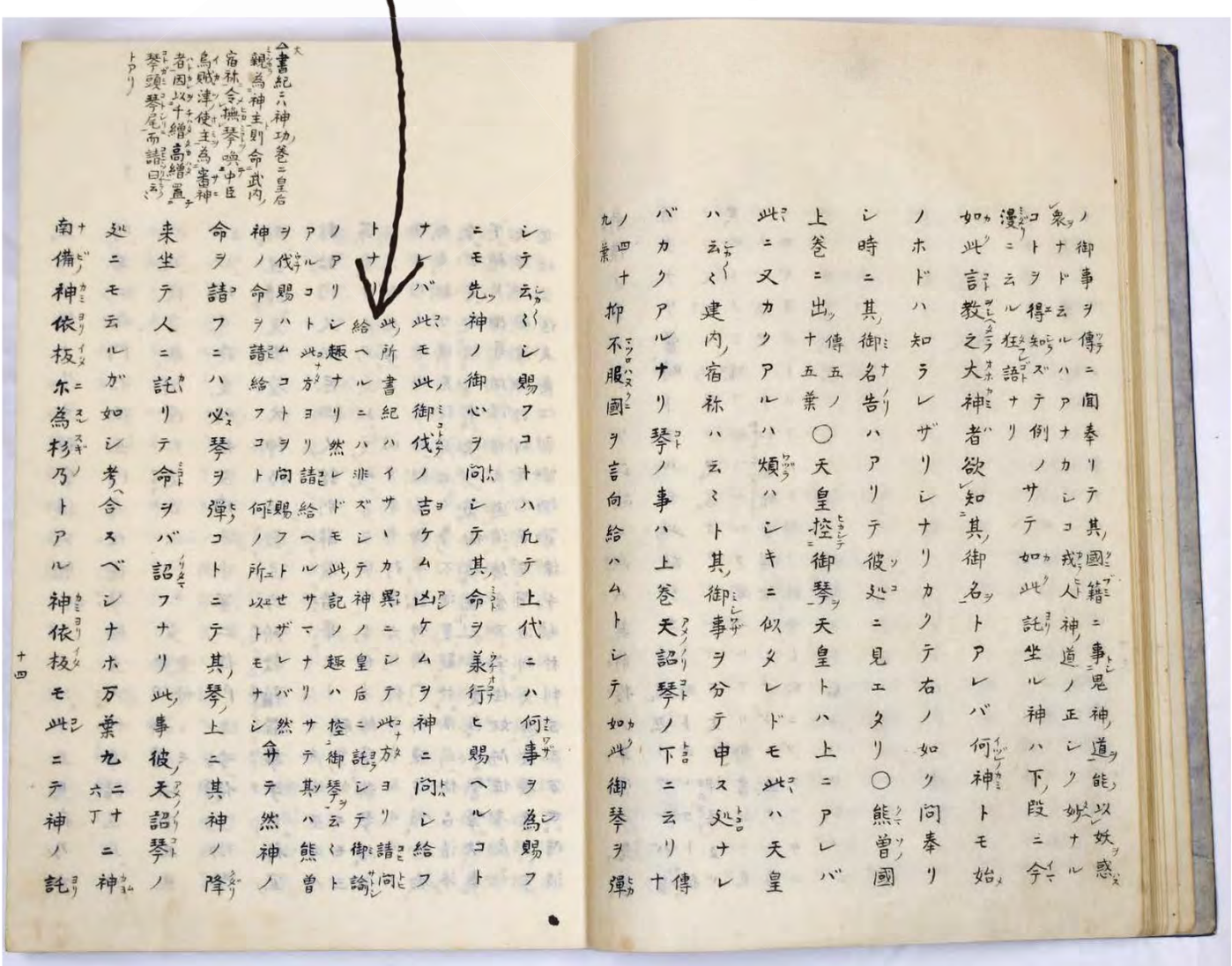
7．下書きが本になるまで

『古事記伝』の執筆にあたって、宣長は下書きと清書を書いています。下書きの段階では『古事記』の本文を書かず、注釈部分だけを書き綴っていきます。後から見直すことも困難なように感じられるほどの細かい下書きですが、割り注(文章の途中、１行を２行に分割して入れる注釈。『古事記伝』では多用される)になる箇所が[　]で括られていることなどから、完成した際の紙面を思い描いていることがわかります。

『古事記』本文に草稿で書きまとめた注釈を入れ込み、内容を改めて整理したのが再稿本です。紙面は理路整然と整い、印刷されたかのように美しい状態になっていきます。



◎『古事記伝』巻３０　宣長著　草稿(上段)と再稿本(下段)

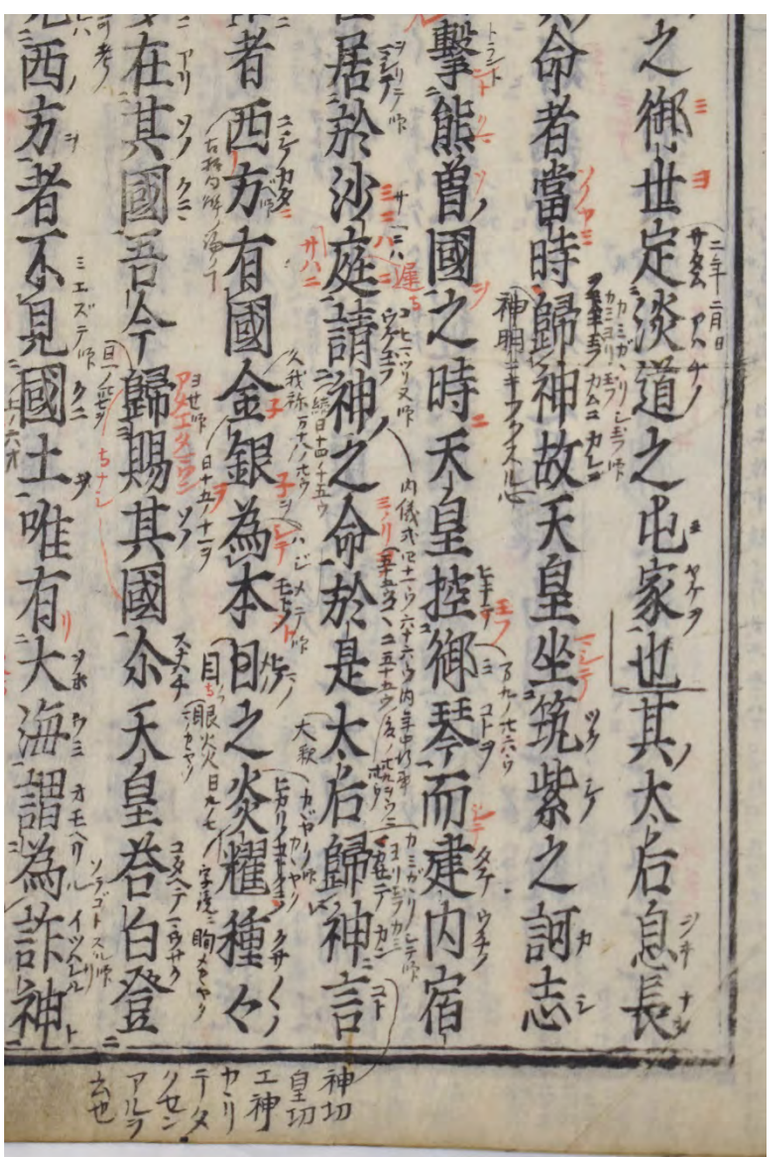


◆『古事記』に見る「こと」

◎『古事記伝』巻１０　宣長著

日本古来の「こと」である和琴は、記紀万葉の中にも描かれています。『古事記』上巻では、須佐之男命から課された試練を、妻である須世理毘売の助けを借りて乗り越えた大穴牟遅神(後の大国主神)が、須佐之男命の元から逃げ出す際に携えたのが、生大刀・生弓矢・天詔琴の３つの道具でした。

宣長は『古事記伝』の中で、「詔琴(のりこと)」というのは、神が来て詔をなさる場所という意味の「詔言所(のりことど)」が省略されたものであるとし、「詔琴」というのが琴の正しい名称で、古来神の心を問うときには必ず弾くものだといいました。



神を呼ぶために琴を使う場面は、『古事記』中巻の仲哀天皇の段にも登場します。

西国を巡幸する仲哀天皇は、筑紫にいて、熊曽を討とうとしていました。神の詔を受けるため、琴を弾いて神功皇后に神がかりをさせたところ「西の方に国がある。そこには、金銀をはじめ、輝く宝が様々にある。その国を帰服させよう」という神託がありました。天皇は高いところに上って西の方を見てみましたが何も見えず、いい加減なことを言う神だと思って、琴を弾くのを止めてしまったといいます。神を怒らせてしまうのではないかと心配した建内宿祢の説得で、再び琴を弾き始めた天皇でしたが、しばらくすると、琴の音が聞こえなくなりました。不思議に思った人々が様子をうかがうと、天皇は既に崩御していたといいます。

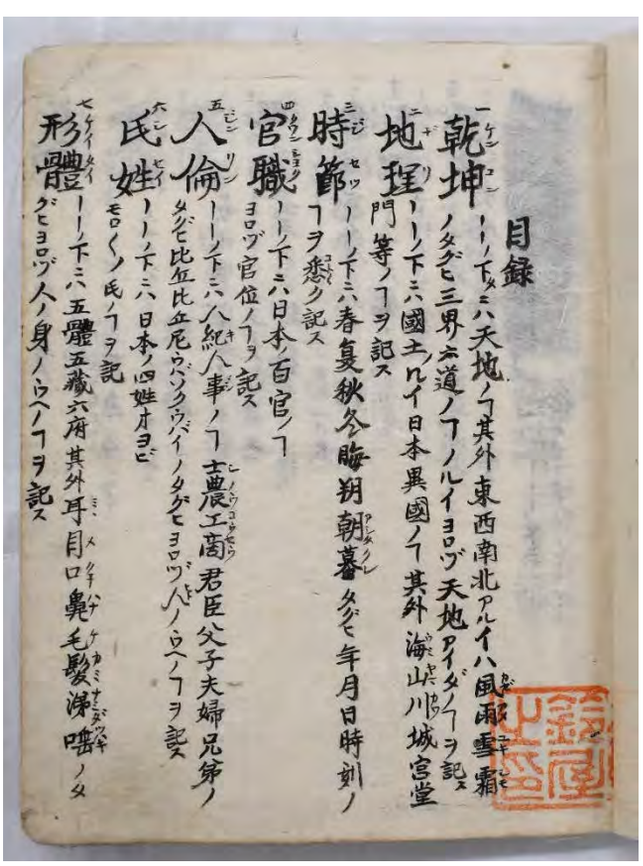
◎『古事記』中巻　宣長著

８．少年の宗教世界

宣長の祖父や父・定利は熱心な浄土宗の信者でした。毎日念仏を唱える姿を見ていたのでしょう。宣長が若いころに書いたノートには、仏教や寺院について触れたものもあります。定利は宣長が１１歳のときに亡くなってしまいますが、その後も宣長の生活には浄土宗や、菩提寺である樹敬寺(じゅきょうじ)が大きく関わっていくことになります。

◎「円光大師伝」宣長筆

宣長は１４歳のとき、浄土宗の開祖・法然上人の伝記を写しています。宣長の家は代々熱心な浄土宗の信者で、宣長も１９歳になると浄土宗本山の知恩院に参詣しました。



１０　興味関心を育むノート

／ 百科事典を作りたい

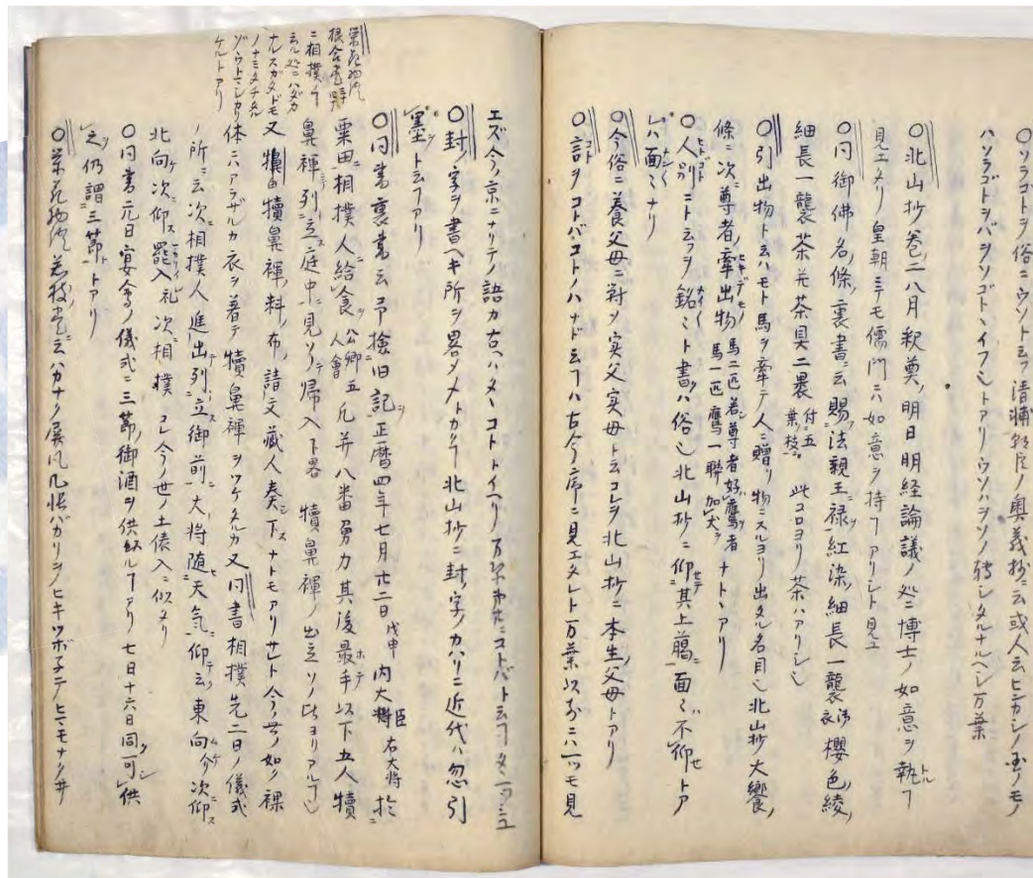
十代の頃から宣長には類纂趣味とでも言うべきものがありました。つまるところ知識・情報のコレクションです。「事彙覚書」では集めた情報を項目ごとに分類して整理します。後に、「よろづの木草鳥獣、なにくれもろもろの物の事を、上の代よりひろめ委しく考へて、しるしたる書こそ、あらまほしけれ（あらゆる動植物や、いろいろな物の事を、古代から時代の移り変わりも含めて書き記した本がほしい)」というように、宣長は百科事典を作りたいという思いを持っていたようです。

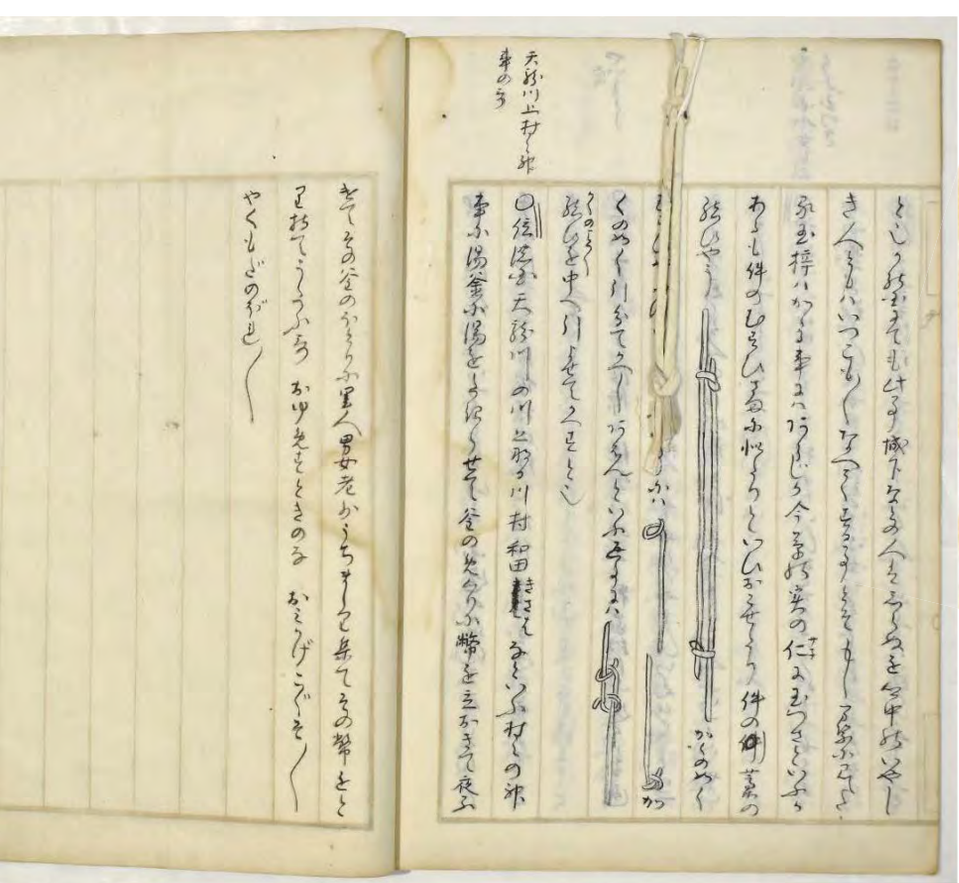
１１．好奇心は続く　どこまでも……

古典研究を本格的に始めても、宣長の旺盛な好奇心は留まるところを知りません。６０代まで書き継いだ抜き書き・聞き書きノートは、後に『本居宣長随筆』と名付けられて現在に伝わりました。和漢も、古今も問いません。本から抜き出した内容、人から聞いた話を好奇心の赴くままに集めた宣長のノートです。

たとえばこんな内容を引用……

引出物というのは、本来、馬を率いて人に贈り物をすることからきている名前だ。『北山抄』に、「次に尊者の率出物【馬２匹、もし尊者鷹を好むは、馬１匹、鷹１聯、犬を加える】」という例がある。





なんと夜這いの作法まで!?

女のもとへ結んだ藁(わら)を贈る。
会わない⇒二本にほどいて返す。
会う　⇒結び目を中央に引き寄せて返す。

見本が貼り付けてある！！

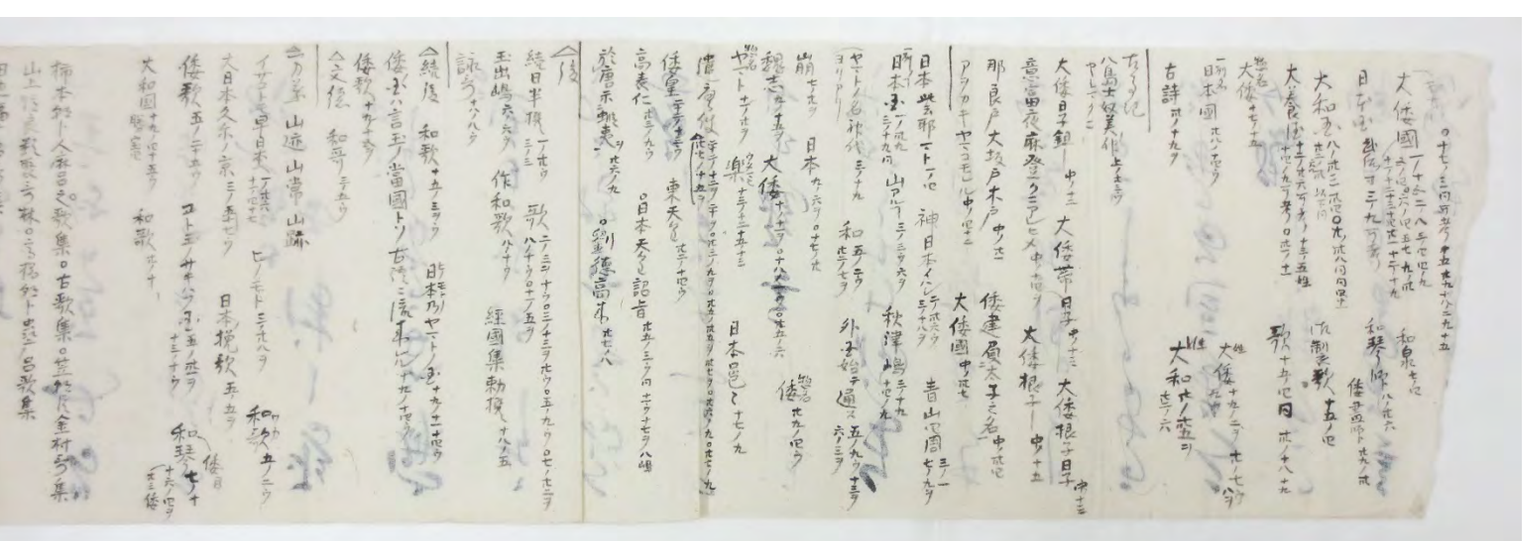
※『万葉集』に出てくる「玉梓」とは、
（宣長の意見）

１２-1．テーマを決めて読む

読んだ本に影響を受けて「天気」について書き集めたり、京都が好きだと思えば、その記事を集めてみたり。

１２-2．ノートからの発展

興味・関心のあることを次々にノートにまとめていくと、そこから研究に発展していくことがあります。日本の呼称を抜き書きした「古書抜き書き」は、大倭国、和泉、日本国……といった日本を指す名前や「和」と付く言葉の出典を『古事記』や『日本書紀』などから集めています。これが発展して著作になったのが『国号考』なのです。

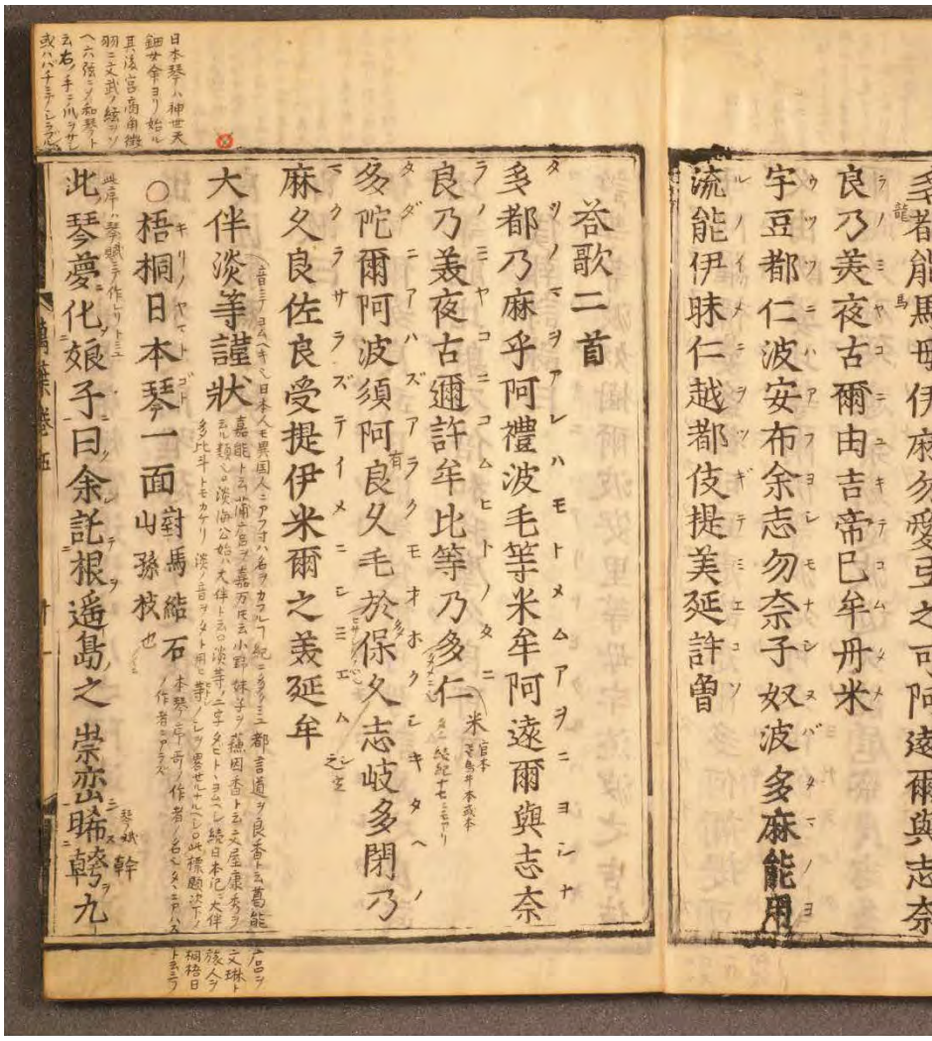


１３-１．手沢本って何？

「手沢」とは「手の垢や脂が付いた」という意味です。手垢の付いた本、誰かが読み込んだ本や愛読書、書き込みのある本ことを手沢本と呼びます。「宣長手沢（本）」と書かれているのは、宣長が書き込みをしたり、付箋を貼ったりして実際に使用した本です。

『古事記』、『源氏物語』のように、宣長の解釈や説が著作にまとめられた本の場合、この書き込みを丁寧に見ていくことは、宣長の研究の過程を知ることに繋がります。

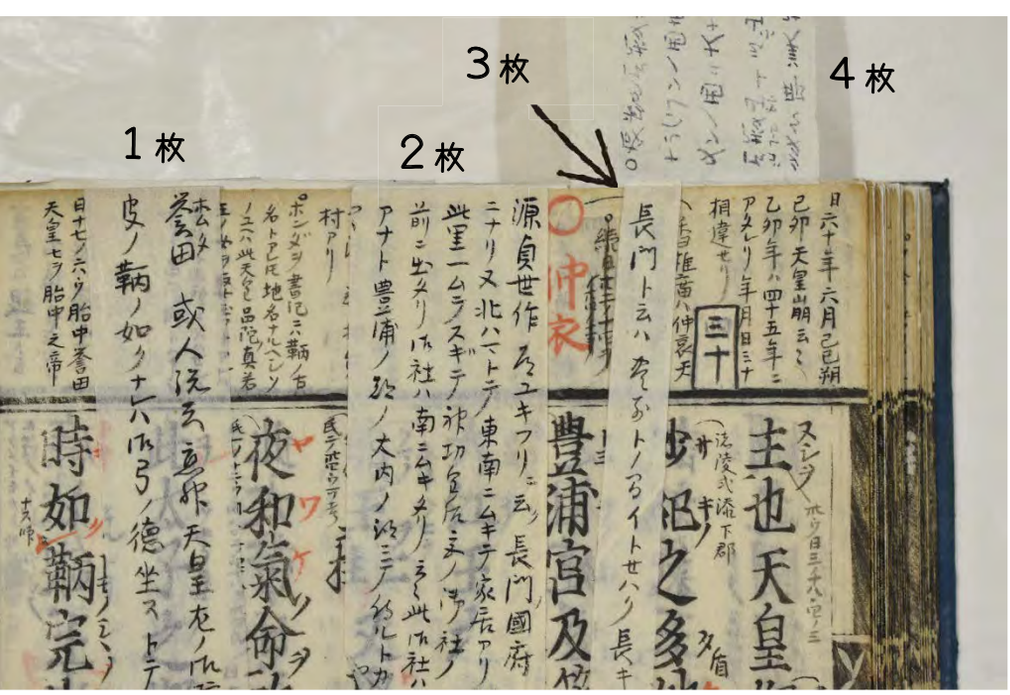
一方で『万葉集』、『日本書紀』などの、著作にまとめられなかった本にも多く書入れがされているものもあり、宣長がその本をどのように読んでいたか、あるいはどのように評価していたかを知る貴重な資料になるのです。



◎『万葉集』巻５　宣長手沢

１３-２．だんだん本がノートになる

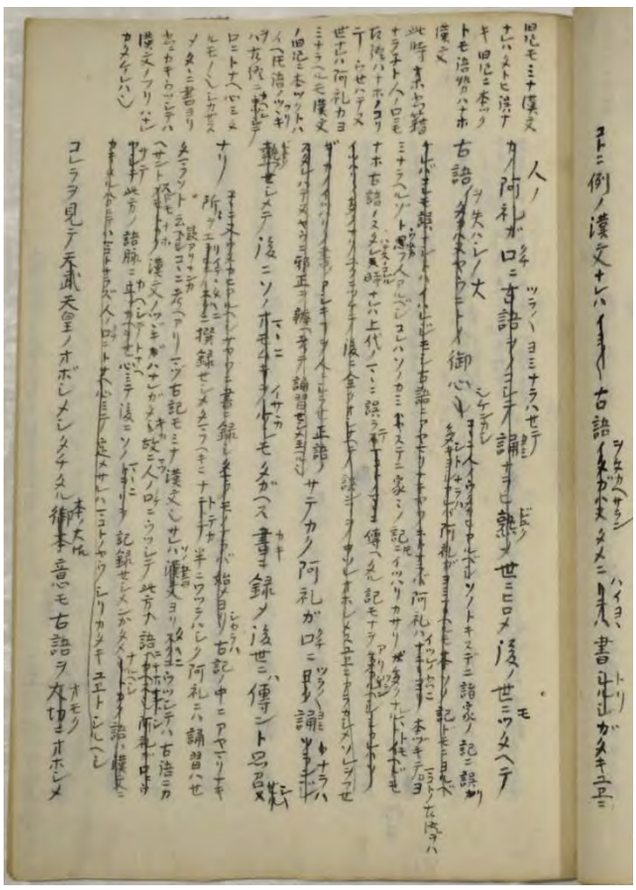
書き込みを続けていくと、そのうちに書き込む余白がなくなってきます。そうしたときに役に立つのが付箋です。現在一般に売られているもののように糊が付いているわけではなく、要するに小さな紙の断片ですが、宣長はここに、人から教わったこと、自身の考察などを書き込んでいきました。直接『古事記』本文の内容には関わらないが、関連する他の本の記事を引用するときにも、付箋が活用されます。こうして本はノートになり、やがて資料集さながらの情報量を持つようにもなっていくのです。

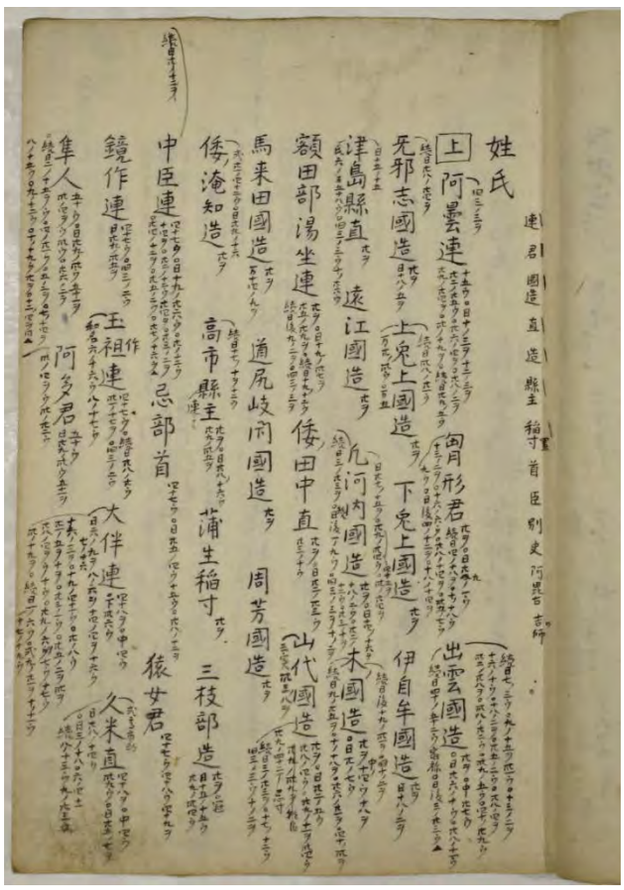


◎『古事記』中巻　宣長手沢
情報量の多さに付箋が貼りきれず、重ねて貼ってある箇所も確認できます。

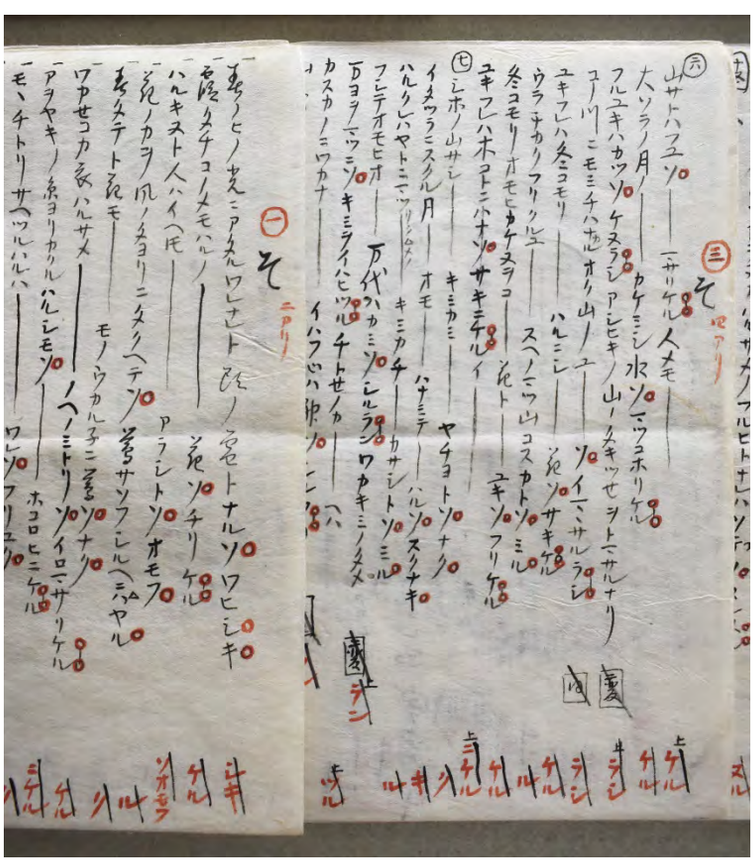
１４．宣長の着眼点

◎「古事記雑考」　宣長筆　書き出し(右)と、後半部分(左)





『古事記伝』執筆の第一歩ともいえる「古事記雑考」の書き出しは、『古事記』から姓氏、地名、文法などを抜き出し、同じ言葉が出てくる諸書の出典を控えたノートのような内容で、宣長が古典で使われる言葉に関心を持ち、それらを網羅的に把握しようとしている姿勢がうかがわれます。「古事記雑考」の後半は『古事記』の内容に関する考察になっており、ノートというよりも下書きという印象が強くなります。『古事記』の成立や訓読についての考察が記され、『古事記伝』巻１、２の草稿になりました。



実証的とも言われる宣長の研究を支えているのは、こうした綿密な情報収集です。「係り結びの法則」について、実例を挙げながら解説した『詞の玉緒』は、漢字にはない、日本語の助詞・助動詞の独自性を論じた「てにをは」研究の集大成といえるものですが、この「実例を挙げて解説する」ために、まずはデータベースを作るところから始まりました。八代集などから、ある言葉が同じ用例で使われている歌をひたすら抜き出していくのです。

◎『詞の玉緒』草稿　宣長筆

画像は用例の一部。助詞「ぞ」が使われている歌を列挙し、語尾がどのように変化しているかを確認しています。

１５．執筆のための資料作り

宣長の生活には、診察や調薬など医者としての仕事と、古典研究というふたつの側面がありました。忙しい日々の中で研究を進めていくためには、情報・知識を整理し、いつでも引き出せるように準備しておくことも重要です。そんなときに役立つのが自作のデータベースや目録です。宣長は、古事記研究という明確な目標が定まる以前から、いくつかの資料を自作していました。最初は本を読むため、後に本を書くためにも活用された宣長の心強い味方です。

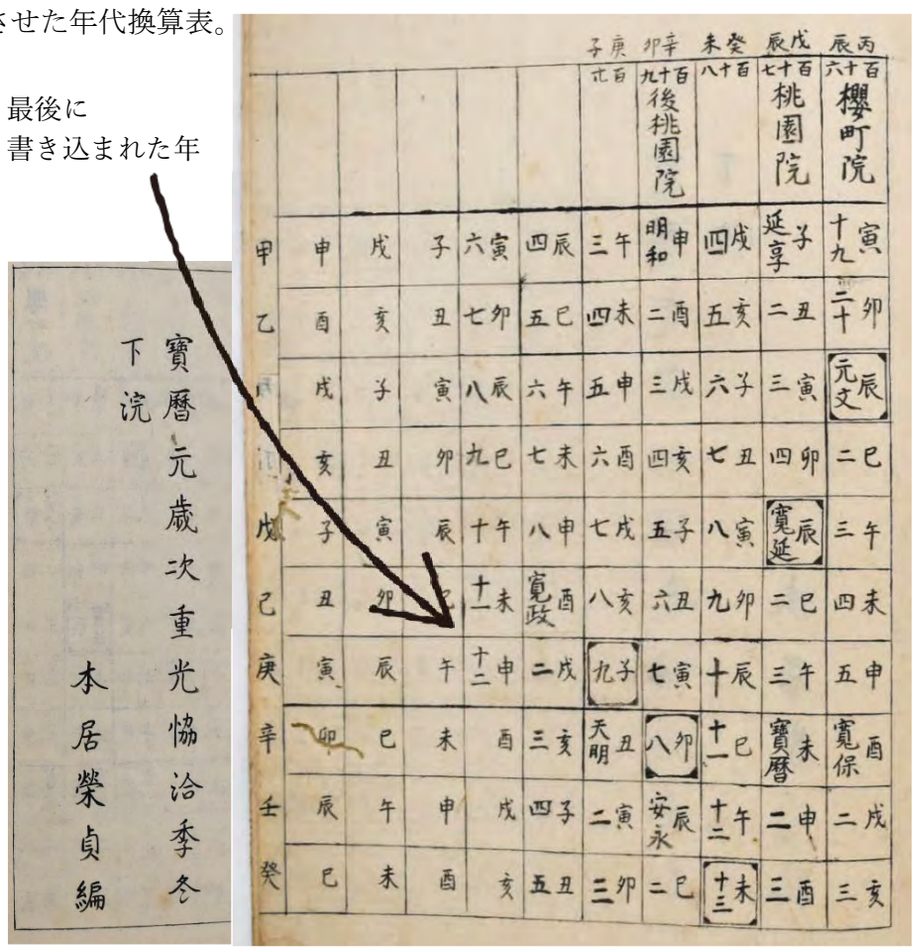
歴代の天皇とその時代の元号、十干十二支を対応させた「年代記」は、宣長２１歳のときに作ったものですが、亡くなる前年の寛政１２(1800)年まで書き継がれており、側に置いて活用していたことがわかります。また、宣長はもちろん、江戸時代の古典研究家たちに重宝された古代氏族の系譜『新撰姓氏録』も、検索しやすいように五十音順に並べ替えた目録を作成しました。

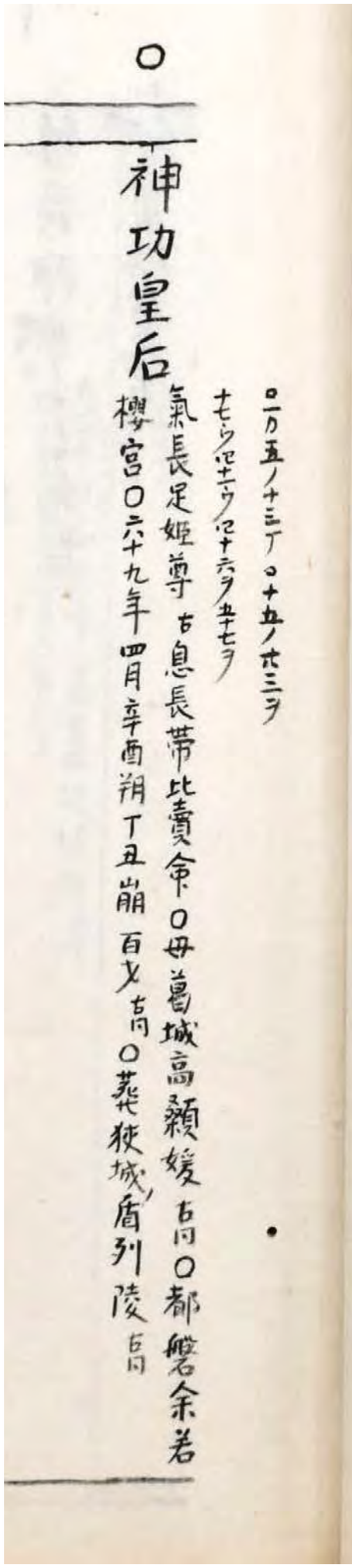
◎「年代記」宣長編

神武天皇以降歴代の天皇を挙げ、それぞれの統治下での元号と干支を対応させた年代換算表。

最後に
書き込まれた年

宝暦元歳(1750)…当時宣長は21歳。
栄貞(ヨシサダ)と名乗っていました。





◎「上代系図」宣長編

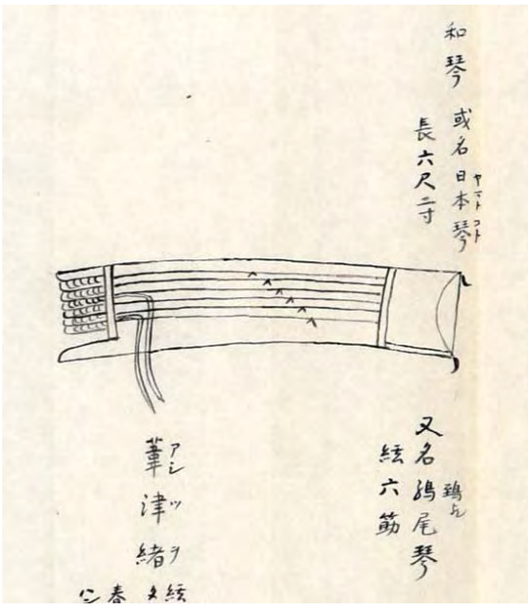
神武天皇から元明天皇までの天皇家の系図。別称や母親の名、崩御した日、御陵(墓)の場所、どの本のどこに関連記事があるのかといったことを併記した、宣長自作のデータベースです。(例)万五ノ十三丁……『万葉集』巻５の 13 丁(ページ)

１６．琴・こと・コト

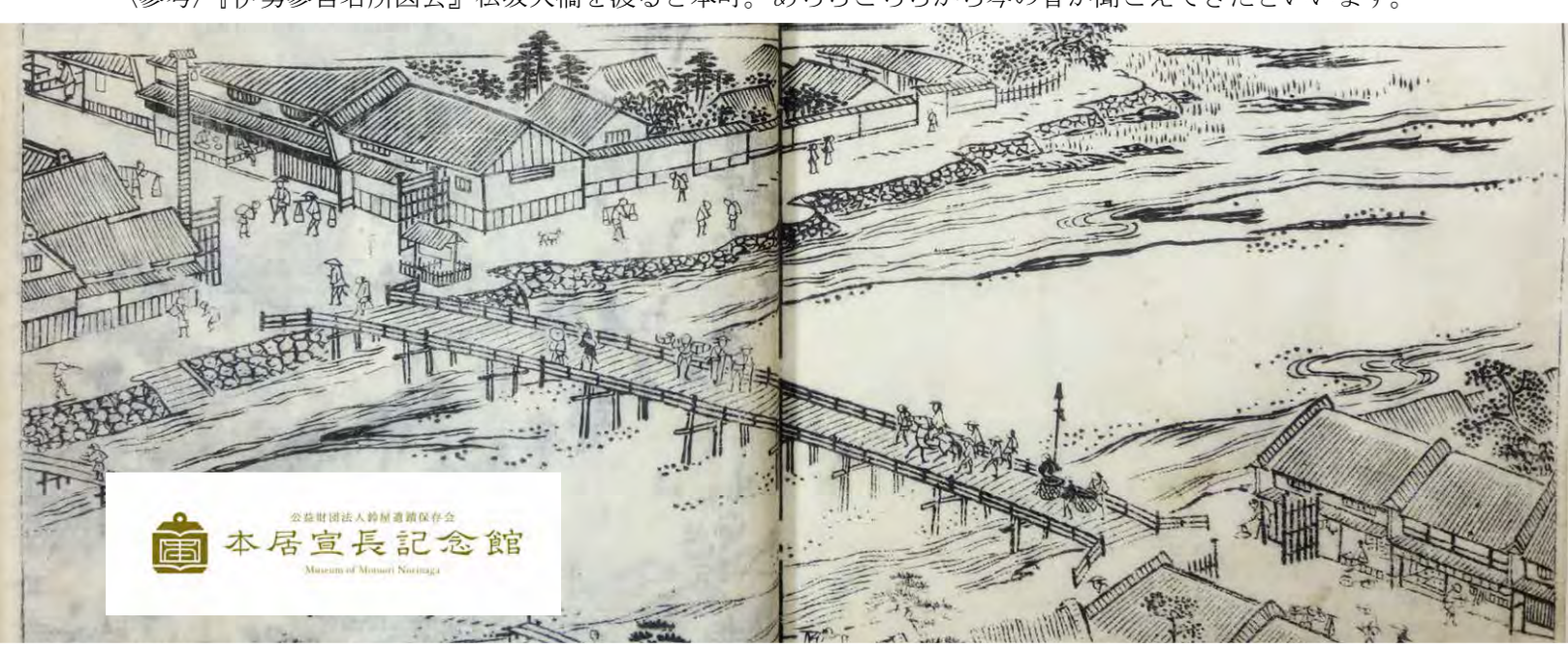
日頃から演奏していたのかどうか定かではありませんが、宣長も自前の琴を持っていました。古を偲ぶ心が高じて、京都の古い家に伝わる和琴を参考に作らせたというもので、箏や琴ではなく、日本古来の和琴であることが宣長の自慢でした。これは天明５(1785)年に門人・三井高蔭に譲られ、現在は三井文庫に収蔵されています。

琴はさまざまに種類があるが、多くは渡来したものだ。その中であづま琴だけはこの国で生まれたものであるから、他の琴とは違う。諸々の神がこの音を辿ってやってくるばかりでなく、神代より男女の仲立ちについても縁のあるものだから**「あづま」**という名を持つのである。奥ゆかしく、たいそう素晴らしい音がするけれど、中世以降、他国から伝来した琴ばかりが重宝されている。この琴を区別して**「やまとごと」「あづまごと」**という名があるが、箏のことを筑紫琴というように、東の国という意味だろうと心得違いをしていたり、歌などで**「つまごと」**と言われるのも、もとはこの吾妻という意味であるのに、爪で弾くからだなどと勘違いしたりして、古の心を知る者はいなくなっている。今では雲の上の音楽で用いられるだけで、日常的に弾く人もおらず、和琴の名をすら知られなくなっているのは、何とも何とも残念なことである。

『鈴屋集』巻９「としごろもたりける和琴を三井高蔭にゆづるにそへたる詞」



◎『體源抄』豊原統秋著、宣長写
管弦や神楽、催馬楽、今様のこと、楽器や装束について説いた雅楽書『體源抄』には、和琴の図も描かれています。宣長自ら写しました。

一方、宣長の妹は箏を弾きました。宣長が京都で医学修行をしていた頃、末の妹・やつが琴を習うので、小さめで音の良いものを誂えてやってほしいと母から手紙が届きました。(「母勝書簡」宝暦４年１０月１３日付）ところが、出来上がった琴は予算オーバー。さらに京都から松坂に届けるときに、琴柱が一本折れてしまいました。あまりに高価では分不相応だからと不満げな母をよそに、やつは大変喜んだようで、宣長に礼を言いたがっている様子が手紙から伝わってきます。

〈参考〉『伊勢参宮名所図会』松坂大橋を渡ると本町。あちらこちらから琴の音が聞こえてきたといいます。